



平成28年度第2回イスラーム講演会開催 「変わりゆく聖地マッカの今昔とイスラーム神学」

2016年11月26日イスラーム研究所主催による第2回イスラーム講演会が文教キャンパスの後藤新平・新渡戸稲造記念講堂で開催された。テーマは、「変わりゆく聖地マッカの今昔とイスラーム神学」と題し、今年3月にサウジアラビアのアブドル・アズィズ国立大学を卒業して、4月から拓殖大学海外事情研究所助手になって研究活動を始められた野村明史氏に最近のサウジアラビアのマッカ状況とイスラームの基本を解説していただいた。イスラーム研究所長・森伸生教授による野村氏の紹介があった後、現地で講師が撮ったばかりの写真を見ながらの講演が行われた。参加者は、最近のマッカの変化の激しさに驚きの目を向け、変わりゆく最新のサウジアラビアの状況を知ると同時に、変わらぬイスラームの原則も理解してサウジアラビアのより深い理解が出来た。ここに講演のレジュメに沿って概略をお伝えする。

1. 聖地マッカ外観

① 名称：マッカ（メッカ）

- (1) アラビア語「マッカ」
マッカの語義：「吸い取ること」→乾燥した土地
- (2) 別称 ウムムル・クラ（「町々の母」の意）（クルアーン6章92節）、とバックカ（「込み合う」の意）（同3章96節）

マッカの歴史は古く、かつてはバックカと呼ばれていたとクルアーン（3章96節）に書かれている。その意味は「込み合う」という。これはマッカが昔から巡礼地として毎年アラビア半島の各部族がここに集まってくるころからついたものと思われる。マッカの意味は、「吸い取ること」でこの土地が乾燥した土地で水が少ない所から名付けられたものと考えられる。その他の名前として有名なのがウムムル・クラ（町々の母）という名称でクルアーン（6勝92節）に記述がある。これはアラビア半島の中でマッカが巡礼と商業の中心として周辺の町々の中で突出していたことによる。

② 地理、気候

- ・マッカ：北緯21度25分、東経39度49分
アラビア半島の西、ヒジャーズ地方のほぼ中心
- ・港町ジェッダから西へ 73km、
- ・マディーナから南へ 約470km、
- ・標高700mから400mの裸の岩山に囲まれたワディー（河谷）
- ・夏の最高気温：摂氏48度を超え、冬は18度まで下がり、平均気温は29度から30度

マッカはアラビア半島の紅海に沿ったヒジャーズ地方に位置する。沿岸の都市ジェッダから内陸に約73kmぐらいいったところにある。またイスラームのもう一つの聖地であるマディーナ（預言者の町）から南に470km離れて位置する。背後には、2千メートル級のヒジャーズ山脈がありその山岳の入り口にあたる。標高700mから400mの裸の岩山に囲まれたワディー（河谷）に位置する。山で

降った雨がマッカで湧き出していてザムザムの泉として有名である。

次に気候について言えば、夏は50度近くになり非常に暑い、冬でも18度ぐらいいり平均気温は30度程度で、極端に夏暑く冬寒い砂漠気候ほどの温度差はない。マッカを訪れる巡礼者は、特に男性は上下2枚の布以外に身に着けないので極端な気温の変化は体に負担をかけることになり、マッカはその意味では巡礼者にとって他の地域より過こしやすい所になる。

③ マッカ周辺の山

- (1) アブークバイス山：地上で最初に創造された山と伝えられる山（標高372m、ハラーム・モスクの東側に隣接）

この山は、現在ハラーム・モスク拡張工事に伴って削られてなくなっている。サウジアラビア政府は、あまり歴史的遺産の保存には興味がないようで、それよりも年々増加する目の前の巡礼者の受け入れ態勢をいかに整備するかだけに集中しているように見受けられる。それは次のヒラー山についても言える。

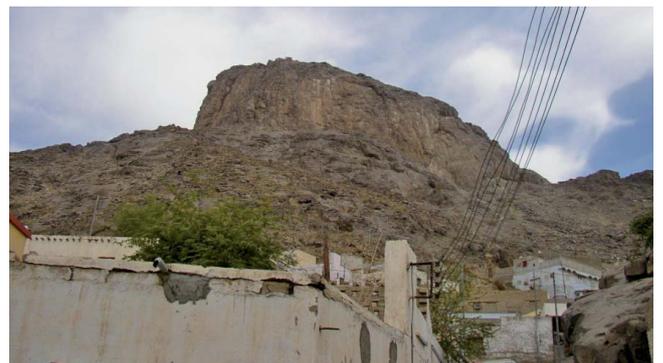
- (2) ヒラー山：預言者ムハンマドに最初に啓示が下った山（標高200m、町の東北約3km）

普通日本だったら宗教の開祖様の生誕地なり、宗教の啓示を受けた場所があれば、必ず何かしらのモニュメントなり、場合によっては大きなお寺が建てられて参拝者で賑わっていろいろなものだが、マッカの一人の商人に過ぎないムハンマドがこの山の洞窟に籠り瞑想をしている時に、いきなり天使から神のお告

げを受け取り預言者に選ばれた記念すべき場所にもかかわらず、サウジ政府はこの山への訪問を巡礼行事には含まれないとし殊更宣伝もしない。そのため山の頂上近くにある洞窟に行くにはかなりの崖道を登らなければならないのにその道は舗装されることもなく石がむき出しで、うっかりすると上の人がつまずいて石を落したら下の人怪我をしそうな状態に放置されている。そんな険しい道でも熱



講演する野村氏



ムハンマドが最初に啓示を受けたヒラー山

心に登ってくる他の国の巡礼者たちを見ていると、やはりイスラームの発祥の地を一目見たいというのは自然な感情なんだと思うのである。

(3) サウル山：ムハンマドがヒジュラ（マディーナへの移住）の時に三日間隠れた山（標高500m、町の西南6km）

この山も預言者ムハンマドがマッカからマディーナへとヒジュラ（移住）する際に、教友アブー・バクルと一緒にマッカの敵から逃れるために隠れた山で、危うく見つかりそうになるところを隠れている洞窟に鳩が卵を産み、蜘蛛が巣をかけて中に誰もいないように装って敵の目を欺くという奇跡によって二人が助かり無事マディーナにヒジュラできたというイスラームの歴史の中では忘れてはならない出来事としてムスリムたちに記憶されている山だが、やはりサウジ政府は、巡礼行事には無関係な場所として一切巡礼者に知らせることはしていない。しかし巡礼者たちは口コミでこの場所を知りやってくるのである。

マッカの町の最近の変化は激しく、森所長のいた頃からは想像もできない変わり方をしていて、それがまだ終わっていない変化の途中にあることは、そこにいて五感を通して実感させられた今回の訪問であった。



ヒジュラする時、教友アブー・バクルと隠れたサウル山

2. イスラーム

日々変化しているマッカの現実から、目を転じてイスラームそのものを見た時、そこには変わることのない教え・信仰を見出すのである。そこで改めてイスラームの原理、基本を理解しておくことは変わらないイスラームを知る上で欠かせないことになる。

① イスラームの意味：原義「帰依」

「神に帰依し、その命ずることに従い、平和を実現すること」

イスラームが他の宗教と大きく異なるのは、その名前にある。キリスト教にしろ仏教にしろ、その名前はその宗教の開祖の名前を付けるが、イスラームは開祖をムハンマドとするならムハンマド教と名付けられるはずだ。しかしそうならないのは、真の開祖は唯一神アッラーでありムハンマドは、その教えの伝達者に過ぎないからで、イスラームの意味する帰依・服従からも分かるようにアッラーに服従し、その教えを守ることを目的とするからである。またイスラームのもう一つの意味である平安から理解されるのは、創造主アッラーへの帰依・服従によって得られる平安を求める宗教であることが分かる。

② イスラームの基礎

(1) 「ラー・イラーハ・イッラッラー」（アッラーのほかには神なし）アッラーの唯一性

(2) 「ムハンマド・ラスールッラー」（ムハンマドはアッラーの使徒なり）

ムハンマドの預言者性と使徒性 ⇒ アッラーからの啓示＝クルアーン

イスラームを宗教として支えているものは、崇拜の対象である神・アッラーは唯一にして他にないことであり、そのアッラーによってあらゆるものが存在させられその意志によって動かされていること。そしてアッラーは、人類最後の預言者ムハンマドに自らのメッセージ（啓示）を託しその聖典としてのクルアーンをすべての人間の導きの書とした。ムハンマドは、アッラーからの言葉を預かった者としての預言者であり、そこに書かれている人が正しく生きるための規則を伝える者としての使徒性を併せ持つ。故にイスラームは、この世界の唯一の創造主としての存在アッラーをその預言者ムハンマドを通して理解し受け入れることが基本となる。

③ イスラームの根本教義：六信条

六信条：アッラー、諸天使、諸啓典、諸預言者、来世、定命の六つの存在を信じること。

イスラームの根本教義としてまず言われることは、6つの信仰箇条である。その中のどれか一つでも欠けるとすべての教義が成り立たなくなる、それぞれが支えあって一つの体系を形作るものであ

る。そしてこれらの信条を受け入れた者をムスリム（イスラーム教徒）つまり服従する者と言う。次にこの6つの信仰箇条をひとつずつ具体的に見てみたい。

●唯一神アッラー

*アッラーの語源：これについては、諸説あるが、その一つとして言われているのは、

(1) アラビア語で神を表すイラーフに定冠詞のアルが付いて、アル・イラーフ（その神）から転じてアッラーとなった。つまり、一般名詞が唯一神を意味するようになった。というもの。

(2) アッラーは絶対神の固有名詞として初めからそう呼ばれていた。

つまりアッラーは一神教を前提として、神そのものをさす固有名詞であった。その証拠としてアラビア語ではキリスト教の聖書における神もアッラーと呼ぶ。

*絶対的存在としての神アッラー：この世界に存在するものは全てその存在をもたらす原因を必要とするが、唯一その原因を必要とせず、永遠に存在できるものはアッラーである。例えば人間は、生きていくために呼吸をして酸素を必要とする。また活動するためのエネルギーとして食べ物が必要であるが、アッラーはそのようなものが無くして永遠に存在する唯一の存在であるということだ。それはクルアーンに書かれている次の言葉による。「1. 言え、かれはアッラー、唯一なる御方であられる。2. アッラーは、自存され、3. 御産みなさらないし、御産まれになられたのではない、4. かれに比べ得る、何もものない。」（112章1～4節）

「アッラー、かれの外に神はなく、永生に自存される御方。仮眠も熟睡も、かれをとらえることは出来ない。天にあり地にある全てのものは、かれのものである。かれの許しなくして、誰がかれの御許で執り成すことが出来ようか。かれは（人びとの）、以前のことも以後のこともも知っておられる。かれの御意に適ったことの、かれらのはかれの御知識について、何も会得するところはないのである。かれの台座は、全ての天と地を覆って広がり、この二つを守って、疲れも覚えぬ。かれは至高にして至大である。」（2章255節）

またアッラーは、全ての物事の創造主であり、管理者である。「アッラーは、全てのものの創造者であり、また全てのものの管理者である。天と地の鍵はアッラーの有である」（39章62 - 63節）生命の源である雨を降らせ、風で雨の許となる雲を運び望むところへ雨を降らせる。太陽や月や星の運航を定め宇宙を規則正しく動かすのもアッラーの力である。そして彼の知識は、あらゆるものに及び見過ごされるものはない。梢から落ちる一枚の木の葉も地中深くで芽を出す一粒の種も知らないものはないのである。

*アッラーの美名と属性：アッラーの性質や本質を知る手掛かりとして、アッラー自らが語った美名と呼ばれる99の名前がクルアーンの中で語られている。人間は自分たちの勝手な想像や希望でアッラーの性質を決めることが出来ない。本当のアッラーを知るためにはこれらのアッラーが自ら示した名前によってしか真のアッラーは理解できないのである。それらの名前は、大きく3つに分けられる。一つはアッラーの優しさを示す名前で、慈悲深いものと言う名のアッラフマーンやよく罪を許す者という名のアルガフルなどがあげられる。二つ目として威厳や厳しさを表す名前として復讐する者という名前のアルムンタキムや威圧する者と言う名前のアルジャッパールなどがある。3つ目としてはアッラーの本質を示す名前として唯一の者としての名前のアルアハド、創造する者としての名前のアルハーリクなどがある。

●天使たち

アッラーへの信仰の次が天使の存在を受け入れることになる。アッラーは、天使を光から創造した。それらはアッラーに仕える靈的存在でガイブ（不可視な世界）に属し、様々な役割をもって存在する。アッラーは、天使たちを使ってすべての現象を起こさせる。その性質上天使は決してアッラーの命令に背くことはなく、その命令を忠実に実行する。その中でも特に重要な任務を帯びている天使は、ジブリール（ガブリエル）と呼ばれ預言者にアッラーからの啓示を伝える役割を負っている。アッラーは人間の祖先アダム（アダム）を土から創ったが、それは人間を地上におけるアッラーの代理として創造した。そのためアッラーは、人間を正しく導くためのメッセージをジブリールを使って人間の中から選んだ預言者に伝えた。また地上で人間が暮らしていくための必要なものも天使を通して与えている。例えば雨を降らせる天使は、ミカーイールと呼ばれ、終末と復活の時を知らせるラッパを吹くのがイスラフィーールという天使である。その他すべての人間にはその両肩に天使がいてその

人の悪行と善行をすべて書き留めている。このようにアッラーと人間を結ぶ天使の存在を受け入れない限り、人間はアッラーの恩恵や意思を知ることが出来ないのである。また天使の存在を信じることは同時に同じ不可視の世界に属し天使と真逆の役目を持った存在のシャイターン（悪魔）の存在も受け入れることにもなる。この悪魔は、アッラーが天使たちにアダムへの敬意をしめす跪拝を命じた時、唯一それを拒否しそれが原因で天国から追放されたことを恨んで、アダムとその妻ハワを喰い天国から地上に追い出す原因を作ったもので、人間と一緒に地上に降りて人間をアッラーの導きから逸らす役割を自らに課した。人間は、このアッラーの命令に絶対的に従う存在である天使とその命令に従わない悪魔の中間の存在として生かされていることになる。また天使や悪魔の存在を信じることは、同時に不可視の世界の存在を認めることにも繋がる。

●諸啓典と聖典クルアーン

アッラーの代理として地上で暮らすようになった人間は、数を増す中で悪魔の働きで本来のアッラーの教えを忘れるようになった。そこでアッラーは、人間に対し新たなメッセージを伝え彼の求める道へ呼び戻そうとするために人間の中から預言者を選び啓典を授けた。「言え、わたしたちはアッラーを信じ、わたしたちに啓示されたものを信じます。またイブラーヒーム（アブラハム）、イスマーイール（イシュマイル）、イスハーク（イサク）、ヤアコブ（ヤコブ）と諸支部族（イスラエルの民の12支族）に啓示されたもの、とムーサー（モーセ）とイーサー（イエス）に与えられたもの、と主から預言者たちに下されたものを信じます。かれらの間のどちらにも、差別をつけません。かれにわたしたちは服従、帰依します。」(2章 136節)

これらの啓典の中で有名なものは、ムーサーに与えられたタウラート（律法）やイーサー（イエス）に与えられたインジール（福音書）であるが、現在、アッラーから啓示された言葉そのものの形で残されているものはムハンマドに啓示されたクルアーンだけである。

*イスラームの聖典クルアーンとは：

アッラーがイスラームの最後の預言者ムハンマドに、天使ジブリールを通じて、全人類に福音と警告のためにアラビア語で伝えたアッラーの言葉である。アラビア語で下されたクルアーンは、各国の言葉に翻訳された時には、それは正確にはクルアーンとは呼ばれず、それは意味の解釈されたクルアーンとなる。故に礼拝で使われるクルアーンは、アラビア語であり、それは一字一句変えることなく受け継がれ、そこに書かれている言葉はアッラーから信者に対して直接語られる言葉として生きていく上での指針となる。

「われは、アラビア語のクルアーンを下した。恐らくあなたがたは悟るであろう。」(12章 2節)

またクルアーンの役割は、それ以前に下された啓典の確証することにもなる。現在残されているキリスト教の聖書は、人の手によって編纂されたものでその中には、アッラーの言葉と一人の人間としての預言者が語った言葉が混在してそれが神の言葉を分離できなくなっている。そこでその中で正しくアッラーの言葉として受け入れられるのは、クルアーンの中の記述と同じものであるかどうかによって判断される。



クルアーン第1章と2章の始め

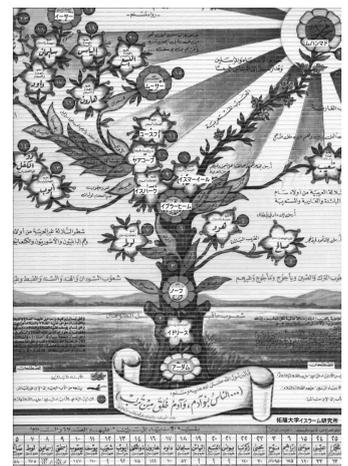
「われは真理によって、あなたがたに啓典を下した。それは以前にある啓典を確証し、守るためである。」(5章 48節)

●預言者たち

預言者の存在を信じることは、アッラーが人間を何のために創ったかを知る上でかせない。何故なら創造主アッラーの存在を知らせ人間にアッラーのメッセージを伝える者として同じ人間の中からその役割を負わされたものの存在がなくてはならないからである。しかし、その者は勝手に自分の想像や利益のために語るに社会の中に混乱や間違った教えが広まることになるのでアッラーによって選ばれた者がその役割を果たすことになる。その選ばれた預言者がアッラーからの本当に遣わされた者かどうかの証明が各預言者に与えられた奇跡である。預言者ムーサーに与えられた杖が蛇になる魔術や、イエスに与えられたライ病を直すといった奇跡は知られているが、それらは全てアッラーの力によって起こされた奇跡でそれを見た当時の人々が最も関心を持っていた分野において行われること

で人々を十分に説得できるものであった。特に預言者ムハンマドの最大の奇跡は、クルアーンそのものであった。当時のアラブは言葉に対する関心が高く詩人と呼ばれる人々が各部族にいて各部族は、詩人同士による戦いを行っていた。そんな中に現れたクルアーンを人々は、一度聞いただけでそれが人間の作ったものではないことを理解した。それを伝えるムハンマドを神からの使いと認めざるを得なかったが、素直に認められないのが預言者の運命であった。人々は先祖伝来の宗教に固執し新しいものを排除するのが習わしであった。ムハンマドも例外なくマッカ時代は、マッカの指導者たちから反感を受け迫害されてマッカを去りマディーナへのヒジュラ（移住）を余儀なくされている。

預言者は、アダムに始まりムハンマドに至るまで数多くそれぞれの民族に遣わされた。中でもユダヤ人に遣わされた預言者の記述がクルアーンには多く見いだされる。ここにある図は、それらを一本の木になぞらえて歴史的な順番に並べられた系譜図である。この中でイスラームに関係する預言者は、イブラーヒーム（アブラハム）で元々イラク地域に住んでいたのが父親を含むそこに住む人々の偶像崇拜の風習に疑問をもって人々と対立しパレスチナに一神教の宗教を求めてヒジュラ（移住）した預言者である。イブラーヒームは、母親が異なる二人の息子、イスハークとイスマーイールの父親で、イスハークからはユダヤ人が生まれ、イスマーイールからはアラブ人が生まれたことで、ユダヤ教とキリスト教の中でもまたイスラームの中でも重要な位置を占めている。イスラームでは特に彼が純粋な一神教教徒として尊敬される。「イブラーヒームはユダヤ教徒でもキリスト教徒でもなかった。しかしかれは純正なムスリムであり、多神教徒の仲間ではなかったのである。」(3章 67節) またマッカのカアバ聖殿は、イブラーヒームと息子のイスマーイールによって再



預言者の系譜図

建された。この時以来カアバ聖殿への巡礼が始まり現在に至るまで続いているのである。このユダヤ教とキリスト教から失われた本来の純粋な一神教を復活させるために、アッラーがムハンマドを預言者として全世界の人間に遣わされたのがイスラームである。



聖モスクの中心にあるカアバ聖殿



イブラーヒームがカアバ再建の時立った立ち処と中の足跡



* 預言者と使徒

クルアーンには預言者と使徒という二つの呼び名が出てくる。その違いは何かと言うと、

- ① 預言者：アラビア語でナビーと言い、啓示によって神の言葉を預かる者。その数は、約12万4千人になると言われ、全ての民族に遣わされた。その役割は、信者への天国の〈吉報の伝達者〉であり不信者への地獄の〈警告者〉である。「人類は(もともと)一族であった。それでアッラーは、預言者たちを吉報と警告の伝達者として遣わされた。」(2章 213節)
- ② 使徒：アラビア語でラスールと言われ、預言者の中で、天啓の法をもたらす使命をもつ預言者。その数は、313もしくは315人と言われる。クルアーンに書かれている使徒は35人である。「われ(アッラー)はあなた以前にも、使徒たちを遣わした。その或

る者についてはあなたに語り、また或る者については語ってはいない。」(40章78節)

●来世

ムスリムの現世での生活の意味は、究極的には死後の世界(来世)での永遠の暮らしをどこで手に入れるかにかかっていると看做しても過言ではない。そこはジャンナと呼ばれる楽園がジャハンナムと呼ばれる火獄の世界に分けられる、永遠の安楽な生活を得るか、永遠の苦しみを得るかのどちらかしかない世界である。そのどちらに行くかは現世での生き方にかかっている。現世で何を行ったのかがアッラーの前で問われる審判が行われ裁かれる。しかしその審判が行われるには、今いる世界がすべて崩壊し新たな世界が出現する終末の後である。そこにはすべての人間が亡くなって復活を遂げてアッラーの前に立たされることになる。来世を信じるとは、終末を含めて復活し審判を受けなければならない一連の出来事も含めたものを受け入れることでもある。かつて預言者ムハンマドが、現世で権力や財力を自慢するマッカのクライシュ族の指導者たちに現世の生活がいかにはなく来世においては価値のないことを説いたが、それを受け入れたのはマッカで虐げられていた弱い立場の人だけだった。

*終末の現象

「天が、微塵に裂ける時、諸星が散らされる時、諸大洋が溢れだされる時」(82章1~3節)

*復活と審判

「墓場が暴かれる時」(82章4節)
 「それぞれの魂が(肉体と)組み合わせられる時」(81章7節)
 「その日、あなた方は(審判のため)みなむき出しにされ何一つとして隠しおおせないであろう。それで右手にその帳簿を渡された者は言う、『ここに来て、私の帳簿を読んでください。いずれ精算に会うことは分かっていた』こうして彼は幸福な生活に入る」(69章18~21節)

「だが左手にその帳簿を渡された者は言う、『ああ帳簿など渡されなければよかったのに。私は自分の精算がどんなものであるか知らなかった。ああその死が私たちの終末であったなら』」(9章25~27節)

*来世：楽園と火獄

「啓典の民の中(真理を)拒否した者も、多神教徒も、地獄の火に(投げ込まれ)て、その中に永遠に住む。これらは、衆生の中最悪の者である。だが信仰して善行に勤しむ者たち、これらは、衆生の中最善の者である。かれらへの報奨は、主の御許の、川が下を流れる永遠の園である。永遠にその中に住むであろう。アッラーはかれらを喜ばれ、かれらもかれに満悦する。それは主を畏れる者(への報奨)である。」(98章6-8節)

●定命

ムスリムは、アッラーから与えられた運命を受け入れなければならない。アッラーはこの世界の創造を始めるにあたり、この世界の終末も定めた。この定めの中にあらゆる被造物は、存在させられ消滅させられる。誰もそこから抜け出すことはできない。

1 人間とその行動も創造

「アッラーは、あなた方を創り、あなた方がなすことすべてを創られる」(37章96節)

「アッラーは天から地までの全ての事物を統御なされる」(32章5節)

2 定命の捉えかた

ハディース「全てあなた達のやり易いように行いなさい。なぜならば幸福な人々にとっては彼らの行為の方がやり易いのであり、不幸な人々にとっては彼らの行為の方がやり易いからです。それから彼(預言者)は次のクルアーンの数節を朗誦した。

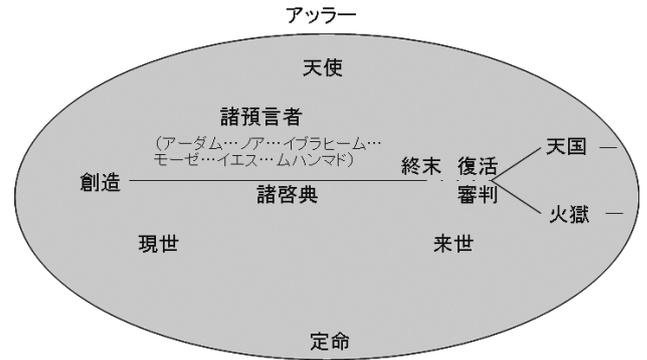
「さて施しをなし、主を畏れる者、そして神の意図を固く信ずる者そういう者にはわれは至福への道のりをさらに容易にしよう。だがけちで強欲で神の意図を嘘だと否定する者そういう者にはわれは苦難への道をさらに容易にしてやろう」(第92章5-10節)

最後に、

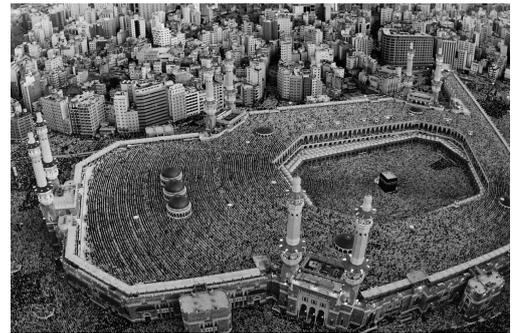
イスラームの教義と人生観

ムスリムは、全ての事を創造したアッラーの存在を信じ、アッラーに完全なる服従を宣言し、天使を通じて伝えられたアッラーの啓示を伝える預言者に従い、来世での成功するために、現世にてアッラーの教えを忠実に実践して、生きることを喜びとしている人たちである。

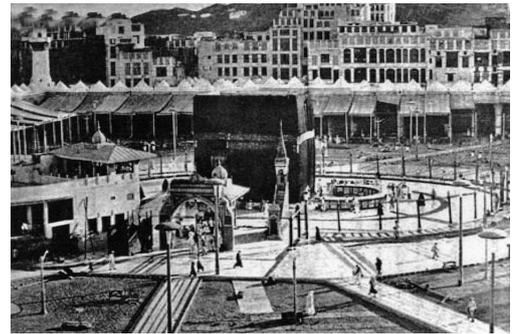
イスラームの教義と世界観



マッカ今昔



聖モスク全景



オスマン朝時代のモスク



かつての巡礼者の石投げ行事



現在の巡礼者の石投げ行事

ベトナムのムスリム事情 (7) イスラームに起源を持つチャム・バニ族に関して

イスラーム研究所シャリーア専門委員会 武藤 愛二
科学委員会委員長

ベトナムのムスリム（イスラーム信徒）事情を調査する中で、イスラームに起源を持つと見られるチャム・バニの宗教的慣行に出会った。チャム・バニは、ベトナム政府が、ムスリムとして登録しているチャム族の中の一支部である。チャム族は、2世紀ベトナム中部フエを首都として建国され、8世紀以降、東南アジアの海上交易拠点、中国とオリエントとの交差点として隆盛を誇った海洋貿易の独立国チャムパ王国（17世紀滅亡）の後裔である。

今回のベトナム訪問時、歴史博物館（ホーチミン）で、チャム・バニの出身である考古学者のBa Trung Phu博士と出会い、チャム・バニに関する博士の論文をベースに、かれ等の宗教的慣行及びその起源等に関する貴重な意見を伺う事が出来た。

序文：

ベトナムの総人口は、約92百万人。多民族国家であるベトナムには、数多くの少数民族が居住し、その数は、公式に54の種族を政府民族委員会が登録（9割近くがキン族）している。ベトナムの人々の信仰する宗教に関しても、多様であり、各地の民間信仰を含めると相当数になるが、共同体・団体での宗教活動が認められている政府公認宗教は、1999年の時点で、6宗教（仏教、カトリック、プロテスタント、イスラーム、カオダイ、ホアハオ）。その後、2011年に、バハイ、Buu Son Ky Huong教、ヒンズー等、6宗教を追加公認）である。この統計の中で、ベトナム政府が公認しているイスラーム（Hoi Giao）信徒は、約75,000人（2009年）となっている。

種 族	ベトナム政府による宗教区分	(登録)概数
チャム族：チャム・バニ	イスラーム教 (スンニー)	40,000人
チャム・ピラウ	イスラーム教 (スンニー)	20,000人
チャム・バラモン	仏 教	55,000人
その他民族：ムスリム	イスラーム教 (スンニー)	15,000人

ベトナム語では、「Hoi Giao」を「イスラーム教」としている。この「Hoi Giao」を直訳すると、「Hoi族（回族）の教え」という意味にもなり、ベトナム政府の「解釈」によれば、「イスラーム教は、中国回族と同じ宗教と一括りに扱われる」ことになる。

しかし、ベトナム政府がイスラーム教徒と一括して定義し、登録している「チャム・バニ」と「チャム・ピラウ（チャム ムスリム）」「その他ムスリム」との間には、宗教的慣行、信仰に置いて大きな違いがある。

(1) 世界のチャム族

旧チャムパ王国が、16世紀以降、ベトナム越族の南下攻勢により、衰退していく中で、海外移住するチャム族が相次いだ。多くは、カンボジアへ、又、海南島経由中国、マレー半島、米国、フランスなどへ移住し、それぞれの地で、チャム族は、チャム文化・風習の伝統を受け継いでいる。現在、全世界のチャム族は、40万人で、カンボジアに22万人、ベトナム国内に16万人、その他マレーシア、中国、タイ、米国、フランスなどに居住している。

(2) ベトナムのチャム族

ベトナム国内に留まり、南部デルタ地帯に移住し、カンボジアのチャム族ムスリム、マレー、ジャワ系移民のムスリムたちと関係を深め、元々の宗教的慣行・信仰を、(ベトナムの) 外のイスラーム世界と交わりながらヒンズー教的、又アニミズムの要素を払しょくして、純化していったチャム族が、ベトナム国内の「チャム・ムスリム」(ホーチミン周辺、南部デルタ地区) である。他方ベトナム中部旧チャムパ王国の領域で、チャム・バニ集落と隣接しながら、新たに「バニ」からムスリムに改宗した人々を、「チャム・ピラウ」(「ピラウ」は、チャム語で、「新しい」の意) と呼んでいるが、宗教的慣行をベースにチャム族を、「チャム・ムスリム」「チャム・バニ」「チャム・バラモン」と、互いに区別して言う呼び方が、一般的である。

尚、「チャム・バニ」の人たちは、「自分たちはムスリムである」

と主張する人もいるが、一般的には、自らの宗教を、イスラームとは言わず、「自分たちは、バニ、またはHoi Giao信奉者である」と話している。

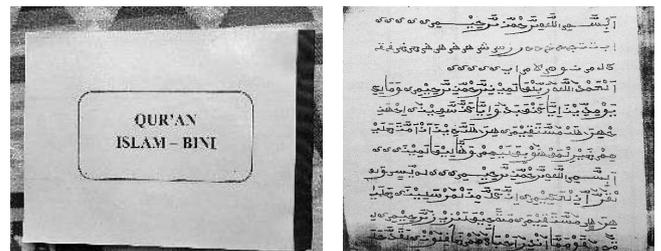
1) イスラームに起源を持つチャム・バニの宗教的慣行

チャム・バニ約40,000人は、主にベトナム中南部（ニントアン省、ビントアン省：旧チャムパ王国の領域）中心に生活している。

「Kura'an」と呼ぶ聖典を持ち、章句を朗誦し、「Po Auloah」（チャム語でアッラーの神）を信じ、シャハーダ（信仰の告白）をし、タクビール（「アッラーは偉大である」と唱える）、ラマダーン月の断食等々、かれ等の信仰、宗教的儀式行事の中には、数々のイスラーム的要素が見られ、その宗教的慣行は、明らかに、イスラームに起源を持つと考えられる。

しかし、以下に見る様に最も特徴的な事を言えば、宗教的慣行・儀式を執行するのは、家族・親族を代表した宗教職能者のみで、一般信者、一般住民は、宗教的諸事の執行を、聖職者に任せ、奉納・献金・供物等を分担することで社会の共同体が成り立っている。

- ① 聖典：チャム語でKura'anと呼ばれ、特別な儀式での礼拝等に聖職者が朗誦する。チャム・バニ出身のBa Trung Phu博士は、その論文の中で、「チャム・バニの聖典は、外界と隔絶された長い歴史の中で多くの章句が散逸し、記述、内容も原典クルアーンと異なっている部分がある。現在は、長老たちが記憶を辿りながら書き写して行ったものが、宗教儀式別のキターブ（本）の中に書き留められている。クルアーンの96章から114章の短い章句が、残っているだけである」「埋葬、結婚式、礼拝、説教、暦の見方等、祭儀式別に分かれたキターブには、クルアーンの章句と解説がクラーフィー書体のアラビア語とチャム語で記述」と記載している。



右は、一行目は、「ビスミッラーの書き出し」、二行目・三行目はアラビア語のabcを記載し、アラビア語教材的な部分。

- ② タクビールとシャハーダ（信仰告白）：チャム・バニの文化紹介を収録したベトナムのテレビ局の記録などを聞いてみると、儀式でタクビール（アッラーフアックバル）とシャハーダを唱えているのが、聞き取れる。しかし、下記の通りタウヒード（アッラーの唯一性）は、証言の通りは、実践されていない。
- ③ タウヒード（アッラーの唯一絶対性）：シャハーダの中で、アッラーの唯一性を唱えながら、同時に、先祖神、道祖神、チャムパ王国（占城国：2世紀から17世紀）王家の先祖神なども崇拜の対象にしている。チャム語で、アッラーをPo Auloahと呼び、その他の神を、Po Yang（道祖神）、Po Palei（鎮守）と呼んで、同時に崇拜していることにより、その宗教的慣行は、多神教的民間信仰と言える。
- ④ 聖職者の礼拝（チャム語：Vat）：Ba Trung Phu博士の説明では、聖職者は、一日5回の礼拝を行っており、その時間は、チャム・ムスリム（スンニー）と同じである。但し、モスクでの礼拝は、ラマダーン月及び特別な金曜日のみであり、後は、自宅で行っているとの事であるが、同席していないので筆者自身は、確認が出来ていない。
ただ、チャム・バニのラマダーン月の儀式紹介のビデオで見ると、聖職者の礼拝の仕方は、（ラカーの回数含め）イスラーム礼拝の仕方とは異なるし、一般信者の礼拝は、身体前面を床に着ける礼拝（五体投地的で、lancan及びtampahと言われる）であり、クルアーンの章句朗誦は、全く聞かれない。Ba博士の解説では、一般信者は、礼拝をしながら、聖職者を經由しながら、願望・頼み事を訴えている。

⑤ 預言者と天使について：Ba博士の説明では、「チャム・バニの教えでは、預言者（チャム語：Mbi. Nabiの変化）及び天使の存在を信じている」との事であるが、特に預言者に関しては、「預言者ムハンマドと、義理の息子アリーを同位に見て、その次にファーティマ（預言者ムハンマドの娘でアリーの妻）がいるとの考えがある」と。預言者ムハンマドは、チャム語で、Mbi Muhammadと呼ばれ、「預言者は、Po Auloahが遣わした人だが、チャム・バニの聖職者を含め、（預言者が）どこの国の人か、その人物像などの知見は全く持っていない」と。

⑥ 結婚式でのシーア派的要素：チャム族は、母系制度であり、「嫁が夫を娶る」「新郎が新婦の家に嫁ぐ」慣習である。ベトナムテレビ局が放映したチャム・バニの結婚式のビデオ紹介では、司祭が新郎を新婦の家に連れて行きながら、新婦に対して「この新郎はアリーの様な男である。貴女は、ファーティマの様にこの男に尽くすことに同意するか？」と問いかけ、新婦が、「喜んで同意します」と答える場面があった。

⑦ 「40イマーム」信仰（チャム語：Emum pak pluh）：研鑽を積み重ねた長老のEmum（イマーム）が、チャム・バニ共同体の中で、「40イマーム」に選ばれるとの事。Ba博士によると、この儀式は、何十年に一度程度の事で、伝説的なものであり、誰が「40イマーム」に選ばれたかを知っている人はいないとの事。

⑧ 宗教職能者による慣行・儀式の執行：聖職者は、下の階位から、チャム語で、Acar（ベトナム語：Thay Chan）、Madin、Tip、Emum（ベトナム語：Mum、Imam）、Po Gru（ベトナム語：Kuru）と職位が決まっている。Acarになる為には、Kura'anの暗記が必須となって居る為、数年間上位者の所で、勉強を積み重ねていく。

Ba博士の説明によると、日々の礼拝を含め、聖職者が、宗教的慣行を（代行）執行するようになったのは、1650年チャンパ王国のPo Rame王が、ベトナム軍との交戦状況の中で、「（戦時でもあり、全員が礼拝する必要は無く）家族・親族から代表者を1-2名選んで、モスクで礼拝させること」と勅令を出したことより、宗教職能者が、代行するようになったのであろうとのこと。

⑨ ラマダーン月（チャム語：Ramuvan）の慣行：イスラーム暦9月で、チャム・バニの宗教的慣行では、最大の行事期間となる。中でも、ラマダーン月明けのEid al-Fitrが最大のお祝い行事になる。放映されたビデオ、Ba博士からの解説を聞くと、かれ等の宗教的慣行は、イスラームに起源を持つが、長く外の世界との接触が閉ざされて行く中で、土着信仰、ヒンズー、アニミズムと融合した「チャム・バニ教」と言える。

* 断食：聖職者のみ。しかも、最初の3日間だけ。4日目以降、一般信者、聖職者の家族が、ズフル（正午）以降にモスクにお供え物を持ち込み、その食事を、Po Auloah（チャム語：アッラーの神）に代わって半分を食べて、持参者に戻す。

* 聖職者は、この一か月間は、モスク内に宿泊し、原則、外出、帰宅は許されない。この間、聖職者が、イスラーム教徒と同様に毎日5回の礼拝を行う。

* 先祖の墓参：ラマダーン月の前、シャバーン月の最後の3日間は、仏教の盂蘭盆会と類似する先祖墓参が行われる。聖職者が各家、お墓に集い、先祖の霊を呼び戻す。最終日には、墓石の下に、（南アジア一般の嗜好品である）キンマの葉と檳榔の実を、「戻る霊が、道中で嗜める」様にと、供える。

* ラマダーン月の特別な日：第一日、15日、20日、30日（最終日）は、特に重要な日で、一般信者、聖職者家族が、モスクにお供え物を持参（特に、ベトナム主産のお米は、後日30日に配布するもの）し、願い事を申し出る。聖職者が、モスクに来た一般信者、家族に、「神の加護を」と祝福する。

* Tarawih（タラウィーの礼拝：ラマダーン月の夜行われる特別な礼拝）：チャム・バニの聖職者（Acar）が、執行する。シーア派は、tarawihをビドア（新たに加えられたもの）として、行わないが、チャム・バニはこの点では違っている。

* ラマダーン月27日：チャム・バラモンたちが、お供え物を持参

して、モスクを訪問する。

⑩ ザカート（喜捨）について：イスラームのザカートの様な規定はなく、ラマダーン月の最終日に、集まったお米を、各聖職者の家族・親族に配布する。聖職者は、家族・親族を代表しているのので、実際は、チャム・バニ住民に対しての振る舞いとなる。

⑪ モスク（チャム語：Sang Mugik）について：モスクが開かれているのは、ラマダーン月及び特別な儀式（金曜日の礼拝も、ラマダーン月以外は、地区によってモスクの持ち回りで年数回）のときのみ。モスク内には、マッカの方角に向かった司祭説教壇がある。短いフトバ（金曜礼拝時説教：Ba博士の説明では、Tip職位が行うが、実際はKura'anの章句を朗誦するだけと）も行われる。



チャム・バニ地区でのイスラーム・モスク

⑫ 金曜礼拝：チャム語で、sut yeng（持ちまわる金曜日）又は zam-at（jum'atの変形）と言われ、イスラーム暦の6-7月に、各村落のモスクにて、持ち回りで、金曜礼拝が行われる。ローテーションは、3年毎取り決める。例えば、6月の第一金曜日は、A村、第二金曜日は、B村と、持ちまわる。従い、6-7月の金曜日は、何処かの村落のモスクで、人が集まり、聖職者の礼拝に同席するという事になる。この持ち回りの金曜日の日程は、共同体村落によって異なる様である。

⑬ 犠牲祭Eid al-Adha（イスラーム暦12月10日チャム語：wa-ha）：チャム・バニは、生贄のお供えはせずに、果物・菓子などのお供えを、モスクに持参して、聖職者とお祝いするとの事。

⑭ 清め（ウドウ）について：19世紀頃までは、各モスクにウドウの水場があったとの事だが、現在は、聖職者が儀式前に、モスク前でウドウを行う様子を、ビデオ録画を通じて見ることが出来た。モスクの前に50程四方ほどの石が敷かれ、その上で、小さなボールや、やかんの様な水入れから水を注いで、ウドウを行っていた。

⑮ マッカ巡礼に関して：Ba博士の説明では、チャム・バニの聖職者たちには、マッカ巡礼の考え、義務は持っていないとの事。他方、伝聞となるが、「チャム・バニのムンが、マッカ巡礼から帰国し、村人に“自分はマッカで、Po Auloahに会ってきた”と話すムン（聖職者）がいた」との話も伝わってきている。

⑯ 埋葬に関して：チャム・バニの遺体は、土葬で、頭部を北、足部を南に向け、顔を西方、マッカの方角に向けて埋葬する。埋葬時に、聖職者が、「埋葬用のキターブ」を広げて、Kura'anの章句を朗誦する。この埋葬の方法は、ベトナムのムスリム（シャーフイー学派）と同様である。

⑰ 割礼の儀式：男女ともに12-15歳の時点で、割礼の儀式を受ける。この儀式を受けない男女は、結婚することが出来ないとの事。

⑱ チャム・バニの名前の由来：「バニ」は、アラビア語のIbn（子供）から来たと言われている。特に、「アリー・ファーティマ」の子供たちの後裔を意識したものであるという人もいる。

2) チャム族の祖先：チャムバ王国（占城国）のイスラーム化

チャムバ王国は、ベトナム中部（Hueが最初の都で、その後北部からベトナム越族の南下攻勢に会い、中南部Phan Rangに首都を移す）地区に、2世紀から17世紀まで独立した海洋貿易王国であった。9—10世紀、その最盛期には、多数の外国人が居留していた。

シリア人の地理学者Al-Dimasqi（1325年）の記述によると、「チャムバ国には、ムスリムと偶像崇拜者が居住している。ムスリムの祖先は、ウマイヤ朝イラク領の知事Hajjaj bin Yusufに追われたアリー党のムスリムたち子孫も含まれている」。又、元朝の旅行史「島夷志略」には、チャムバ国と中国との交易の実態が記述されている。

尚、歴史を遡ると、651年にササン朝ペルシャが倒れるが、その前637年に、唐の長安に、ヤズデギルド三世が、アラブ軍に対する唐の援軍を要請した事も、漢書に記載されている。従い、700年前後に、再起を目論んだペルシャ軍（ゾロアスター教徒ら）が、アリー党の残軍と一緒に、唐の長安に居住していただろうし、更に、750年に「ザブの戦い（battle of the Zab）」にて、ウマイヤ朝が、アッバース朝・シーア・ペルシャ軍に倒れるが、その後アッバース朝の主流から離れたアリー党・ペルシャ軍が、シルクロード経由（乃至は海路）チャムバ国に行きつき、居留していたであろうことは、想像に難くない。

ベトナム中部の都市Phan Riで、石碑が見つかり、その石碑に、チャム語とサンスクリット語で、次の様な事が記載されている。

「ねずみの年、アッラーの神（Po Auloah）に帰依した一人の男が、チャムバ国の改革発展に献身していた。しかし、人々は、（アッラーが何かかわからず）困惑した。男は、アッラーに、絶対服従する為として、マッカに移住した。何年後、男が、王国に戻ると、国は、アッラーと名乗る国王によって、1000年から1036年まで統治された」。この様に、イスラーム、ムスリムに関する記述のある石碑が二つ見つっているが、一つは、1039年の日付で、もう一つも1025—35年の石碑と判定されている。結果、チャムバ国の人びとの間に広くイスラームが、伝わったのは、10世紀の初めてであったと、歴史学者は考えている。

当時のチャムバ国は、胡椒、香木（沈香、白檀など）の産地でもあり、中国とインド・西アジア・オリエントとの中継貿易地として（特に9—10世紀）隆盛を誇っていた。チャムバ国の王家の人々は、長い事、ヒンズー教のシバ神を信仰していたが、中継貿易の主体を担った人々が、アラブ人、ペルシャ人、中国人らであったことより、海外からの宗教の国内布教にも寛容であったと思われる。尚、17世紀には、チャムバ国の国王が、イスラームに改宗した事も、記録されている。

従い、チャムバ国では、多くの人たちが、外来宗教であるイスラーム教を信仰する様になり、宗教的慣行は、イスラームに則って行われていたと考えられるが、その後、王国衰退期に、海外移住をして外界との接触を保った人たちは、「チャム・ムスリム」として、本来のイスラームの慣行を世代間で引き継いできたが、他方、外界と閉ざされた環境に置かれた人たちは、長い歴史の中で民間信仰との融合を辿り、イスラームから逸脱していったものと考えられる。



チャム・バニ地区のチャム・バニのモスク（Sang Mugik）で、殆ど施錠されているので、特別な儀式時以外、一般人の入出が出来ない。

3) ベトナム人ムスリム間の宗教論議と1980年合意（シャーフイー学派を公認）

ベトナム政府は、法務省の法令の中で、信仰の自由を認めている。しかし、多民族国家の融和統合を目指す政府は、民族委員会や、民間信仰を含め宗教の公認作業を行いながら、各宗教団体の動きを監視管理している。例えば、宗教内の職位などは、「当該宗教共同体の中でのみ認める」とか、新たな宗教の公認登録に対する調査審査を通して、「個々の宗教活動の規制、監視等」を行っているのが実態である。

その一例が、ムスリム学派の80年合意である。1950年代当時、

特に南部のデルタ地方のムスリムたちは、ムスリムが多数いるカンボジア・プノンペン教育施設に、子弟を留学（マレー語とイスラームを勉強）させ、その後、マレーシアの大学で、商学部・工学部での勉学と同時に、宗教学部でハディース、タフシール等を学ばせるグループと、サウジ・マディーナに直接留学させるグループ（この中には、ベトナムの共産主義化を嫌って、サウジから直接米国に帰化する留学生も相当数いた）に分かれていた。

ベトナム戦争終結後、マレーシア帰りを迎えたムスリムたちと、米国帰化留学生の影響を受けたムスリムたちの間で、論議（シャーフイー学派ムスリムとワッハブ派ムスリム）が過熱化し、小競り合いにまで発展した。

結局、1980年ベトナム政府が乗り出して、「ベトナムのイスラームの学派は、シャーフイー学派とする」との指導書をムスリム合意文書（ハーキム：Hajji Issa）として出すことになった。

論争点の幾つかは、以下の通り。

- ① ラマダーン月のイフタル（断食明けの食事）について。
ワッハブ派：少々の水と果物（デザートなど）を食し、先ずは礼拝をし、礼拝後にイフタルをとる。
シャーフイー派：礼拝までの時間は限られているが、水、果物以外にも、若干食しても良い。無論、礼拝後十分なイフタルをとる。
- ② 金曜日の夜の「ヤシーン」章句の朗誦について。
ワッハブ派：ビドアであり、やってはならない。
- ③ シャアバーン月15日のクルアーン章句朗誦：
ワッハブ派：ビドアであり、やってはならない。
- ④ その他、ドアー（祈り）時の手の位置、アーシューラ、預言者の生誕祭、クルアーン章句朗誦時のバスマラ（ビスミッラー：アッラーの御名によって）から始まるクルアーンの各章の最初にある文句）を詠むかどうか等々であった。

小さな共同体の中での小競り合いは、けが人が出るほど深刻であった。結果、政府の民族委員会が乗り出して、収まった。その後、政治的な背景もあってか、ムスリム子弟のサウジ留学は、中々政府の許可が下りないとの事。

尚、現在ベトナム政府は、仏教を「国教」とする政令を検討しているとの事だが、多数の少数民族を抱えるベトナムでは、検討中の「国教」は、あくまでも、「国を代表する宗教」との位置づけで、今後とも政府は、「宗教・信仰の自由を認め」同時に申請宗教団体の人数などを審査して、「公認宗教」を決めていくとの事。

「宗教・信仰は、個人の自由」とされているが、政府の要職に勤務している公務員、特にベトナム共産党関係者は、実際の個人・家族の宗教を記載せず、「宗教：無」と記載してとの事で、宗教に関しての「政府の監視管理」のネガティブ要因が見えている。

4) チャム・バニの宗教的慣行に見るシーア派要素と今後の考察課題

Ba Trung Phu博士の説明を受けると、イスラーム的要素の中に、以下の様にアリー党（シーア派）の要素が見え隠れしている。今後、引き続き、チャム・バニの起源を追い求めて、シーア派との接点を考察していく。

- ① 「40イマーム」：イマームに対する権威は、シーア派的な要素と同時に、神秘主義的な考えが残っていると思われる。
- ② アリーの位置づけ：預言者ムハンマドとアリーを同列化し、「アリーを神格化」した見方をしている。
- ③ 結婚式での「アリーとファティマ」のたとえ説話
- ④ 聖職者の権威と行為代行は、なぜ起こったのか。

最後に、Ba Trung Phu博士の名前は、ベトナム名で、母系社会出身故、Baが家の名前、母親方の名前になる。博士のチャム名は、Ariyaで、宗教名は、Ibrahimとの事である。ベトナムの戸籍制度では、宗教名を戸籍登録することが出来るが、名前の最大文字数は、18文字との事（ベトナム名のみ戸籍登録という制度は廃止された）。

因みに、友人のベトナム人ムスリムの方のフルネームは、Mohmed Amine Bin Yusuf Almarhim Ibrahimだが、18文字制限の為、Mohmed Amine名で戸籍登録している。同氏のお子さんは、Mohmed Arifin Le Binhと、母親方のLe Binhのベトナム名も戸籍登録している。

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究所
〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14
TEL：03-3947-2419 FAX：03-3947-9416
ホームページURL: http://www.sri.takushoku-u.ac.jp

拓殖大学 イスラーム研究所 ニュースレター

平成29年2月15日発行 第53号
発行人 拓殖大学イスラーム研究所
編集人 イスラーム研究所客員教授
柏原 良英

正統四代カリフの時代－アブーバクル (30)

(前回からの続き)

アブーバクルは人々のなかで最もアッラーの使徒を敬愛した人物である。アッラーの使徒もアブーバクルを最も敬愛した。この事実からも、アブーバクルの心にこの試練が与えた衝撃は他の者よりと比較にならぬ程に大きいものであったことは想像するに難くない。

しかし、自分の悲しみを抑えて人々の混乱を収拾した。

アブーバクルのこの平常心と忍耐の根源は一言で言うならば、彼の尊称「スィディーク」(信じて疑わない者)が示すものに他ならない。

かつて、アブーバクルは普通の人と変わりなかった。クライシュ族が喜ぶことに喜び、アラブの感情が動かされることに動かされ、喜怒哀楽すべて普通の人が感じるごとくに感じ、味わいも痛みも強さも弱さもすべて普通の人と変わりなかった。ただ、アブーバクルの性格で特筆すべきは、心の優しさ、寛容さ、苦難にあっては人への大きな慈悲であった。この彼の優しい性格でいかにしてあの大試練に心を乱されることなく、切り抜けることができたのか。預言者がアブーバクルに人々のイマームとして礼拝するように命じたとき、アブーバクルの娘のアーイシャはアブーバクルの声が重責に耐えかねて人々によく聞き取れないのではないかと、心配したほどの気の優しい人物であったはずなのに。

だが、アブーバクルはイスラームに入ったとき、以前にはなかった人格を得た。その人格の基本は預言者への敬愛、誠実、信頼、完全な確信である。

アブーバクルのイスラーム入信は純粹で誠実であった。預言者が語ったことすべてを深い信頼と純粹な信仰で安心して受け入れた。アブーバクルはいかなる状態でも自分よりも預言者を敬愛した。

アブーバクルは預言者を最もよく理解していた人物であり、預言者の心に最も近い人物であった。それ故に、預言者が言おうとしたことを即座に気付いた。

ある日、預言者が説教台で次のように述べたときのことである。

「アッラーがアッラーの許に居ることと、この世の栄華のどちらかを一人の下僕に選ばせました。そして、その下僕はアッラーの許に居ることの方を選びました。」

アブーバクルはこの言葉を聞いたとたん、大きな声をあげて言った。

「あなた様の身代わりとして、我々自身と父母を犠牲に捧げます。」

人々は彼のこの言葉に非常に驚き、口々に言い合った。

「見てみよ。彼は何てことを言っているだ。」

しかし、この世の栄華よりもアッラーの許に居ることの方を選んだこの下僕とは預言者自身のことであることを、アブーバクルは即座に気付いていたのである。それ故、先の言葉が思わず出てしまった。人々は預言者がアッラーの許へ移ることが近いことを知らされていたのである。

アブーバクルが説教台で預言者の死を人々に知らしめた言葉は人々に忍耐を諭し、人々を慰め、最大の苦難に毅然と立ち向かわせたのであった。ムハンマドが一生をかけた教えがその言葉の中に凝縮されていた。アッラーのみを崇拜し、偶像崇拜を禁じ、預言者ムハンマドの個人崇拜さえも禁じた教えがその中に息づいていた。

「ムハンマド様を崇拜する者にとっては、確かにムハンマド様は死んだのである。アッラーを崇拜する者にとっては、アッラーは生きておられ死ぬことはない。」

・・・アッラーは生きておられ、死ぬことはない。

アッラーは我々と共におられ、我々に恵みを下さるお方である。我々を援助して下さるお方である。我々を支持して下さるお方である。確実にアッラーの宗教は全世界へと広まる。真理にふさわしいのは勝利のみである。

信徒の衆、立ち上がれ！最良の道を後世へとつなげ！輝く光を広め、新しい宗教を暗黒の世界へと広めよ！・・・

そのような思いがアブーバクルの言葉に込められているかのようにあった。

衝撃的なこの出来事に遭遇した時、彼は一瞬の動揺も見せず、それよりも近い将来のを見ていたかのようにであった。あたかも、彼は敵を見すえて、イスラーム教徒の剣は抜かれたままであることを敵に警告せんとしているかのようにであった。

(次号に続く)

研究会報告

【平成28年度第4、5回タフスィール公開研究会開催】

今年度第4回目のタフスィール(クルアーン解釈)公開研究会が、10月22日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。講師は有見次郎イスラーム研究所客員教授でクルアーン第17章夜の旅章78～111節を解説した。第5回目のタフスィール公開研究会は、12月17日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。講師は徳増公明イスラーム研究所客員教授でクルアーン第18章洞窟章1～31節を解説した。

محتويات العدد

- 1 . المحاضرة الإسلامية الثانية للسنة 2016 عن مكة وإسلام
مساعدة لمعهد دراسات الشئون الخارجية : نومورا أكيفومي
- 2 . مقالة عن المسلمين في فيتنامو
رئيس لجنة العلوم لمعهد دراسات الشريعة : موتو أيجي
- 3 . مقال : الخلفاء الراشدين (30)
مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
- 4 . أخبار المعهد: الدور الرابع و الخامس لدراسات التفسير (سورة الإسراء والكهف)